



MAEDA Saya



TANABE Seri



MIURA Kenji

思考 ⇄ 試行

金沢美術工芸大学 油画専攻
三浦研究室

2021年2月13日(土)～21日(日)

11:00am ~ 6:00pm 水曜定休

Galleria Ponte ガレリア PONTE



NIKI Konomi



YAMADA Sakuya



ごあいさつ

金沢美術工芸大学油画専攻では、学部3年次から研究室制により、主な指導を担当する教員を学生が選択します。学生諸君の(心の)声から察するに三浦は…地塗りを教えてくれる、主に裸婦を描いてる、いつも難しそうな顔で歩いている、講評・合評会で苦言が多い…等、前向きとも後向きともとれる印象を持たれていると推測します。

その状況下において三浦研究室を学部3、4年次で選択している、または学部時代から修士課程の現在まで担当が続いている学生について、完成作のほかエスキース・ドローイング・試作を含めて俯瞰する視点で展示したいと考えました。大学を離れた展示により自身の制作・研究について客観的な検証を行うことの意義を学生たちに伝えたいところ、皆の賛同を得ました。

学生時代の学びは、造形についての「思考」と表現へ向かう「試行」の中で醸成されます。創作の起点となる「感性」は、個人の総体由来のものであり教え教えられることは困難です。しかしながら各人が技法・材料について修練し、自身の主題を模索していく中で、新たな視点を見出し独自の表現へと進展させていくことは可能です。本展が学生の、そして私自身の感性を深化させていく上で良き機会となることを期待します。

末尾になりますが、ガレリア ポンテ様には、本展の主旨へのご理解ならびに新型コロナウイルス感染防止対策等のご配慮を賜りました。この場をお借りし心より御礼申し上げます。 三浦 賢治

Statements(掲載作品、自身の制作について)

山田 朔也 「〈国土創成〉習作」 1167×1167mm 木枠・麻布・白亜地・油彩

自分の絵が嫌いです。絵を描くことが億劫です。昔はそうではなかったはずですが。

日本神話『古事記』においてイザナギとイザナミは、未だ形を成さぬ世界に降り立ち、天沼矛(あめのぬぼこ)を差し入れ、かき混ぜ、国土の原点を創りました。その姿に、このどうしようもなく崩れ去った私のこの心をかき混ぜ、確固たる意志を創ってくれるのではないかという希望を重ねました。

イザナギとイザナミが私を救ってくれる救世主であることを願い、この主題に取り組んでいます。

前田 沙耶 「Still Life - chair and bone -」 1620×1303mm キャンパス・油彩

静かに絵を描くことが好きです。

モチーフと向き合う時間を大切にしています。モチーフは静かに私の前に立ち続け、私に様々なことを教えてくれます。モチーフを選び、モチーフを組み、椅子に座り、そしてようやくモチーフを見たときに最初に受けた感動を忘れないように、毎日少しずつ描いていきます。少しずつ絵が出来上がっていく感覚も好きです。描きながらの発見も当然あり、それはさながら初対面の人の新たな一面を知っていくようです。

向き合った瞬間に飛び込んでくる情報は毎日同じようでありながらそうではない…そのような情報を咀嚼し私なりに解釈し、筆を動かすことで返事をします。

私が描きたいのは「一瞬を切り取ったような記録」ではなく「向き合った対話の記録」でありたいと思っています。

仁木 このみ 「優しい時間」 1303×1620mm(木枠サイズ) 木枠・枝・花・糸・麻紐

表現の自由が争われたとき、命の重さが政治的に扱われたとき、自分の無力さを慰めるために繰り返した行為から出来上がった作品。使われているのは間伐された枝や浜に流れ着いたプラスチックです。どれも私たちの生活の傍らに散らばるモノの一部です。そして以前は実用されて私たちの生活の一部を担ったモノでした。

このようなモノや命の循環、時間の巡りは常に変化を生み、不変や終焉が無いことを静かに示しています。私の元へと流れ来ては去っていくモノたちを一時的に留めることで、モノは大きな循環の輪から切り離され、そのモノ自体の魅力を放ち始めます。

棚部 芹 「まどろむ」 1303×1620mm キャンパス・油彩

私は色彩をテーマとして制作を行っている。

私にとって色とは日常のあらゆる場面で自身の心を動かしてくれる存在である。そして色を選ぶという行為は自分自身の感覚の変化を知るために必要な行為である。

画面の中に配置される色彩や色彩同士の関係は、私がこれまで生きてきた中で取り込み、思考、実験をして形成したものであり、自らの記憶や経験と繋がっている。現在描いている題材は風景的なものが多いが、私はこのモチーフを用いながら、頭の中ではガラスを透過して見える風景や、そこに映り込む自身を含めたイメージを描いている。絵と対峙した時、自身はガラスの向こうを見つめながら、同時に自身と向かい合うという双方向的なイメージを持っている。実際の風景の色ではなく自身の中にある色彩を用いるのは、自己と向き合うという視点を深める役割を担っている。

三浦 賢治 「静物」 273×220mm シナベニヤパネル・白亜地・卵テンペラ・油彩

1988年3月、学部3年の春休み。同級生の友人から借りたリュックを背負い(旅の前半、盗難により紛失!)、40日間のヨーロッパ単独旅行を敢行しました。そして辿り着いたパリ・ルーブル美術館。レオナルド・ダ・ヴィンチ(聖アンナと聖母子)の実物を初めて見ました。

油彩画を志して以来憧れていたその絵は、当時(モナ・リザ)と並びの数メートル離れた壁面に、仕切りも無い状態で架けられていました。〈モナ・リザ〉周囲の喧騒をよそに暫しこの名作と正対し、徐々に絵に近づき画面をほぼ真横から見ました。幾度も筆が重ねられたのか、聖母マリアの首すじから肩にかけて絵具溜まりの凹凸が見て取れました。果てのない高みにあると思っていた作品にこのような画面との格闘の跡があることを知ったとき、筆と絵具を用いて描くということ、画面と時間を過ごすことの意味を伝えられたような気持ちになりました。

卵テンペラ・油彩技法をとおして対象の存在感を追究する一方で、主題となる人体と周囲の空間が混然とした、技法・材料に拘らない大掴みな表現にも魅力を感じます。絵画史における数多の様式を行き来する中で、いつしか自身の居場所となる座標にたどり着きたいと考えています。

思考⇒試行

金沢美術工芸大学 油画専攻
三浦研究室

2021 / 2 / 13sat - 21sun
11:00 am ~ 6:00 pm 水曜定休

山田 朔也 YAMADA Sakuya
(3年)

前田 沙耶 MAEDA Saya
(4年)

仁木 このみ NIKI Konomi
(修士課程1年)

棚部 芹 TANABE Seri
(修士課程2年)

三浦 賢治 MIURA Kenji

【感染症対策と入店のお願い】

- ・マスクの着用と、入店時に店頭にて手指のアルコール消毒をお願い致します。
- ・発熱や咳、咽頭痛だるさや息苦しさなどの症状があるお客様はご遠慮いただいております。
- ・店舗内の入場人数を5名までに制限しております。(一時的に廊下にてお待ち頂く場合があります。)
- ・換気を重視し、扉や窓は開けたまま営業致します。
- ・お客様のご理解ご協力のほど宜しくお願いいたします。

 **Ponte**
ガレリア ポンテ

〒921-8031
金沢市野町1-1-44 宮本ビル1F
tel & fax 076-244 6229
galleria_ponte@nifty.com
<http://galleria-ponte.art.coocan.jp/>

【駐車場】
画廊並び左右に100円パーキング(1h100円)がございます。日曜、祝日は画廊となりの野町デンタルクリニックさん駐車場をご利用ください。

